ワイン産地としての北海道空知地域と振興局の取組み

研究員　長谷　祐

1　日本ワインの産地：北海道

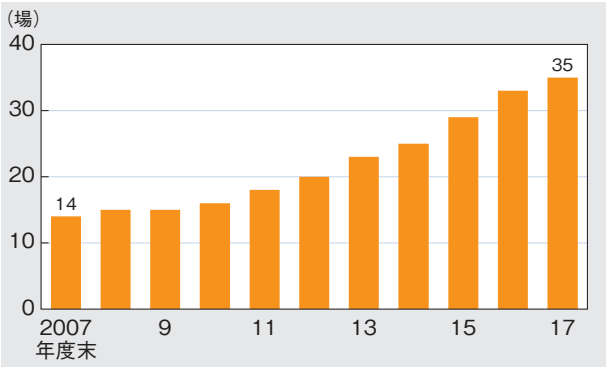
日本のワインが注目されている。近年では国際的なワインコンクールで日本のワインが入賞することも珍しくない。さらに、2018年に施行された「果実酒等の製法品質表示基準」によって、国産ぶどうのみを使用して国内で醸造されたワインを「日本ワイン」として表示できるようになった。これを機に、日本ワインに対する消費者の関心も高まっている。

北海道は日本ワインの生産量が全国３位であり、さらに道内で製造されるワインの90%以上が日本ワインという、国内有数の日本ワイン産地である。道内はワイナリーの新設も盛んで、17年度末時点のワイナリー数は35となっており、これは10年前の２倍以上にのぼる。（第１図）

近年、道内で新設されているワイナリーの特徴として、ぶどう栽培からワイン醸造までを一貫しておこなっていることがあげられよう。それらワイナリーの多くは小規模ながら個性的なワイン造りを進めており、北海道での新しいワイン造りの一翼を担っている。

札幌市の西方に位置し、岩見沢市や滝川市などを含む空知総合振興局管内には、そうした個性的なワイナリーが多く開設されている。現在、６つのワイナリーと多くのヴィンヤード（醸造設備を持たないぶどう農家）があり、14年に公開された映画「ぶどうのなみだ」の舞台になるなど、知名度も広がりつつある産地である。

第１図　北海道内のワイナリー数の推移



資料　北海道農政部「醸造用ぶどう導入の手引（改訂第2版）」より作成

2　空知管内の新しい動き

空知管内での醸造用ぶどう栽培は、1970年代に北海道ワイン（株）が浦臼町でぶどう畑を開墾したことから始まる。このぶどう畑は現在、北海道ワインの自社農場「鶴沼ワイナリー」として、日本最大規模の醸造用ぶどう畑（120ha）になっている。

その後も管内の一部で試験栽培などが続いていたが、2000年代に入り転機が訪れる。三笠市の農家が農産物の高付加価値化を目指して1998年にぶどうの栽培を始め、2002年に醸造免許を取得してワイナリー事業を開始した。この山崎ワイナリーのワインが国内で高い評価を得たことで、空知管内は醸造用ぶどう産地として注目（注）されるようになった。

もう一つは09年に岩見沢市に移住し、12年にワイナリーを開設したアメリカ人醸造家ブルース・ガットラヴ氏の存在である。ガットラヴ氏はアメリカと日本でワイン醸造に関わった経歴を持っており、氏の開設した10Rワイナリーは受託醸造（カスタム・クラッシュ）を主業とする日本でも珍しいワイナリーである。

10Rワイナリーのカスタム・クラッシュでは、ぶどう生産者が原料を持ち込み、ガットラヴ氏の指導のもとで醸造をおこなう。醸造されたワインは生産者が全量引き取り、自らのワインとして販売する。つまり、ぶどう生産者は自身の醸造設備を持たなくても、カス

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

タム・クラッシュを利用することでオリジナルワインを造ることが可能となる。

10Rワイナリーの開設以降、空知管内でもヴィンヤードが増えており、その多くは、将来的には自身の醸造設備を持ち、ワイナリーとなることを目指している農家である。

10Rワイナリーが管内で新たなワイン生産者を生み出すインキュベーション機能を果たしているといえよう。

3　空知総合振興局「空知ワイン室」

以上のように管内でワイン産業が盛り上がりを見せるなか、北海道空知総合振興局では「空知ワイン室」によるワイン振興に取り組んでいる。

10年に振興局の特定課題として「空知ワインの振興」施策が始まり、13年には地域政策課内に「そらちワイン振興室」を設置した。

その後、ワイン産地としての知名度が広がるなかで、ワインと食を結びつけた取組みを強化するため、16年に設置部署を商工労働観光課に変更、現在の「空知ワイン室」となった。

空知ワイン室の取組み内容は大きく①生産者支援と②情報発信・プロモーションに分けられる。

①としては、生産者向けセミナーの開催や、管内関係者による連絡協議会(そらちワイナリー・ヴィンヤード連絡協議会)の設置、気象・土壌に関する情報の蓄積と提供などがおこなわれている。空知管内は道内の他産地と比較して、ぶどうの単収が少ないことが課題となっており、ぶどう栽培に関する情報提供は管内ワイナリーからも評価が高いという。

②としては、消費者向けセミナーや飲食店向けセミナーの開催、ワインを楽しめる屋外イベント「そらちワインピクニック」の開催支援、管内のワイナリー・ヴィンヤードを紹介する「そらちワインガイド」の作成などをおこなっている。(第２図)

第2図　そらちワインガイド表紙

資料　北海道空知総合振興局HP

空知管内には、生産本数が少なく、コアなファンもついていることから、販路開拓に積極的ではないワイナリーも多い。しかし、彼らも「顔の見える関係」での販売には意欲を示している。例えば、そらちワインピクニックは、振興局の支援のもと、ワイナリーで構成される実行委員会が主催し、管内ほぼ全てのワイナリーおよびヴィンヤードが出展している(12年の第１回は振興局が主催)。

4　ワインを起点とした地域振興

そらちワインピクニックは年々参加者が増加しており、19年には前売り券が完売し、東京から参加したワインファンもいるなど、ワイン産地としての空知の評価は高まりを見せている。

一方、個々の小規模なワイナリーでは観光客の受入れに課題があり、この点については、振興局の支援もあり、地元飲食店での料理とのマッチングや、観光タクシーによる少人数でのツアーの開催など、他産業との連携が見られるようになっている。

空知地域は、今後もワイナリーやヴィンヤードが増えていく見込みである。小規模ワイナリーの集積と、ワイン産業を起点とした地域振興を進める事例として、ワインファンのみならず注目の地域である。

(ながたに　たすく)

(注)空知管内では、98年以降、夏季の高温の頻度が高まり(気候シフト)、醸造用ぶどうの栽培適地となっている。